

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- **翻訳教育** 山岡洋一
 - 翻訳者育成教育をどう考えるべきか
出版翻訳者の育成を目的とする教育は容易ではない。教えることが逆効果になる場合もある。何ができ何ができないかを考える。
- **翻訳を翻訳する** 河原清志
 - 翻訳とは何か—研究としての翻訳（その3）
「翻訳とは〇〇である。」というテーゼの探究が本稿のシリーズであるが、世には暇な学問あり。「〇〇とは翻訳である。」と語る。是如何に。
- **翻訳論関係書籍ご案内** —— 北村彰秀
 - 東洋の翻訳論 III ——蔵蒙対訳「学者基本典」を出発点として——
「東洋の翻訳論」「続 東洋の翻訳論」に続く完結編を紹介する。
- **おすすめしたい韓国の本** 福田知美
 - わたしの英語勉強法
アジアで最も TOEIC の平均点が高い韓国で、英語上級者 17 人が自身の英語の勉強法を詳しく伝授した本を紹介したい。
- **翻訳業界イベント** 河野弘毅
 - 20周年記念JTF翻訳祭の企画意図
日本翻訳連盟（JTF）が開催する JTF 翻訳祭は 20 周年を迎えて従来の構成を大きく変更し、カンファレンス形式で開催される。
- **お知らせ**（再掲載） 山岡洋一
 - 最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳者育成教育をどう考えるべきか

最近、何人かの方に翻訳者育成教育に取り組むように求められた。プロの翻訳者を育てるための教育は、過去には翻訳家が弟子を育てるという形があったし、出版社の編集者が若手を育てる仕組みもあったし、翻訳学校で翻訳家が教えるという方式も一時期あったが、いまではどれも力を失っているという。だから、現に出版翻訳を行っている人が教育を担わないと、若い翻訳者が育ってこないというのである。

個人的には、若手をプロの出版翻訳者に育てる教育はきわめて難しいと思うので、求められるのはありがたいことだが、乗ろうとは思わない。だが、この点について考えていることはあるので、以下に記しておきたい。

まず、原則の問題として、ある年齢に達したものは後進を育てる義務があると考えられる。教師という言葉が教師を意味することからも分かるように、教育というのは本来、老人の仕事である。子供が一人前になって隠居したものが教育にあたるのが自然の姿なのだ。したがって個人的には、翻訳という職業で生計をたて、子供が独立したのだから、翻訳者を教育することで社会に恩返しをするのは、当然のことだと考えている。しかしこれは、あくまでも原則の問題である。具体的に何をすればいいのかは、さまざまな要因を考えて決めていかなければならない。

とくに重要な要因は、どうすれば出版翻訳者をほんとうに育成できるのかである。じつのところ、翻訳者教育にはこれまで 25 年間、休みなく取り組んできた。その間に少しは自慢できる成果があがった部分もあるが、失敗の方が桁違いに多かった。だから、成功の確率がきわめて低いのはなぜなのか、同じ失敗を繰り返さないためにはどうすべきかを考えて、ある程度の答えがでなければ、新たな取り組みはできない。

いま、翻訳者育成教育というときに求められているのは、もっぱら出版翻訳者を育てるための教育であり、そのなかでもある形態のものだと思う。具体的には、翻訳学校で行っているような教室での教育か、そうでなければ、もっと非公式な形で弟子をと

るよう求められているのである。そこでまず、教室での翻訳者育成教育について考えてみよう。

翻訳学校で教えたのはもう 15 年近く前までである。翻訳学校が一種のブームになっていたころだ。通信教育には何万人もの受講者がいたというし、通学コースの人も高かった。教えはじめて 2 年か 3 年たったころ、翻訳学校という業界が何ともいびつな構造になっていることに気づいた。受講者の大部分は出版翻訳を目指しているのだが、講師にすら、出版翻訳で生活できる人が少ないという事実があったのである。あるとき講師控え室でわたしの訳書が話題になり、そこにいた何人かの講師にうらやましがられてしまった。みな、下訳の仕事はあっても、訳者として名前をだせる仕事はもらえないということだった。これには驚いた。そして、翻訳学校で教える意欲をすっかり失ってしまった。

考えてみれば、当然のことだったのである。出版翻訳はプロの仕事であり、どんな職業でもプロとして食べていける人はごく少数だ。プロになるための教育を受けたい人が急激に増えたとき、講師が不足して、下訳程度の実績しかない人に頼らざるを得なくなったのである。これでは翻訳者教育がうまくいくはずがない。何年かの後には当然ながら、翻訳学校のブームは去り、教育を受けたい人が頼れる場が不足するまでになった。

この事実をみれば、出版翻訳者の教育には独特の難しさがあることが分かる。プロになるための教育を受けたい人がいくらいても、教育を受けてプロになれる人はごく少ないのである。だから、出版翻訳者育成を目的とする教育はそもそも成功率が高くなりようがないのだ。15 年ほど前といまとを比べると、出版不況のいまでは成功率がさらに下がっていても不思議ではない。現に出版翻訳を職業にしている人すら、生活費を稼ぐのが容易ではない現状で、新人が食い込み、他の職業並みの収入が得られるようにするのは、まったく容易ではなくなっている。

出版翻訳者育成を目的とする教育は、たとえば自動車教習所や英会話学校で行われている教育とは性

格が違っている。自動車教習所なら、ほぼ全員が運転免許を取得できるし、英会話学校でも英会話に慣れるという目的なら、ほぼ誰でも達成できる。プロの出版翻訳者を育成しようとした場合、そうはいかない。教育の目的をある程度でも達成できる受講者の比率は、そもそもごく低いのだ。

このため、翻訳を教室で教えるときには、大部分の受講者がプロにはなれないことを認識したうえで、授業料を払ってくださる大切なお客さんだと考えるか、そうでなければ、下訳者として最低賃金にも満たない収入で働いてくれる人を探す手段にするしかない。どちらも恥ずべき行為だと思うのであれば、教えることはできないのである。15年前にはこの単純な事実が分かっていた。当時の失敗の原因の1つはここにある。

これは教える側の問題だが、受講者の側にも問題があった。受講者は何を求めているのか。おそらく、翻訳がうまくなりたいと希望していて、授業で翻訳のノウハウを教えてもらえるはずだと考えている。だが、翻訳のノウハウを確立している人は、少なくとも後進を指導するという目的に適した形で確立している人は、いまの日本にはおそらく1人もいない。そういう人がいて、しっかりした教育をしているのであれば、出版翻訳を席卷しているはずである。そうっていないのだから、翻訳のノウハウなどいまの日本にあるわけがないことが、少し調べてみればすぐに分かるはずだ。

ノウハウがあって、それを学ばば誰でもうまくなれるという性質の仕事はたしかに世の中にたくさんある。しかし、翻訳はそういう仕事ではない。だから面白いのである。だから面白いという点が直感的に分かっている人に向いている仕事なのだ。逆にいえば、教室で教えてもらいたいという人には向いていない仕事なのかもしれない。翻訳のノウハウを教えると宣伝して受講者を集めるのは、幻想をタネに金儲けしようとする最悪の商売なのかもしれない。15年前に失敗した一因はここにあるし、いまでも教室で翻訳者育成教育を行うことに消極的な理由の1つはここにある。

週に1回程度の授業ではほとんど役立たないという点も過去の失敗から学んだ点であり、いまでも消極的な理由の1つだ。プロの出版翻訳者になり、生活費が確保できるようになるのは、現状では思い切り難しい。はっきりいって、司法試験や公認会計士

試験に合格するより難しい。司法試験や公認会計士試験なら年に何千人かは合格するのだが、プロの出版翻訳者になって生活費を確保できるようになる人が年に数十人もいるはずがないからだ。

司法試験か公認会計士試験に合格した人の話を聞いてみるといい。1日15時間の勉強を年に364日のペースで何年か続けたといった話が聞けるはずだ。年に約5,500時間である。これだけの勉強を続ければ、たいていのことは学べる。このペースで翻訳を学べば、かなりうまくなる。社会人ならそうはいかないだろうが、それでも、週に40時間以上、年に2,300時間以上を使うことは可能だろう。土日と休日に15時間、平日に2時間である。週に1回、年に30回程度の授業ではどうにもならない。役に立たないことが分かっている授業料をいただくわけにはいかない。

いまの時点で考えつくのは、週に最低5日、1日に最低5時間の全日制教育である。これならたとえば1年でかなりの教育ができるかもしれない。だが、この方法が現実に可能なのだろうか。教える側にとっても学ぶ側にとっても負担が大きすぎるのではないだろうか。

まったく別の要因もある。出版翻訳に隣接する産業翻訳の業界で翻訳者の需給バランスが崩れているという問題である。以前なら、産業翻訳業界で翻訳者が不足していたため、産業翻訳で生活の基盤を確立して出版翻訳に進出する方法があったが、いまでは産業翻訳で食べていくのもそう簡単ではないように思う。出版翻訳者を目指す教育を受けているものにとって、少なくとも産業翻訳で食べていけるという安全網がなくなっているようなのだ。この状況で翻訳者育成教育を行うのであれば、かなりの覚悟が必要になる。

翻訳教育を受ける側にも、以前とは違う姿勢が必要になっていると思う。プロになるのは容易ではなく、まして人並みの収入を確保するのは難しいことを承知のうえで、それでも出版翻訳に取り組みたいという強い意思が必要だろう。社会のなかで翻訳が果たす役割を認識し、収入がたとえ少なくとも役立つ仕事をしたという強い意思が必要だろう。

そういう点を後進に伝えるのも教育の役割だと思うが、そのために受講者を教室に集める必要はない。「翻訳通信」を読んでいただければいい。

つぎに、もっと非公式な形で弟子をとる方法について考えてみよう。はっきりいって、現状で新しい弟子を受け入れるのはきわめて難しい。過去の失敗から学んだ点だが、翻訳のように難しい仕事で弟子をとるには、相手の一生に対して責任を負う覚悟がなければならない。何しろ、成算がないまま、かけがえのない何年かを翻訳学習にかけるよう求めることになるのだから。

そう、何年かをかけなければ、プロの翻訳者になれるとは考えにくい。その何年か、教える側も教えられる側もすべてをかけなければいけない。何年かたって、これではプロになれそうもないということが分かった場合、どのようにして責任をとればいいのか。産業翻訳で生活できるようにするのも、前述のように簡単ではない。別の就職先を紹介できる力があれば安心だが、一翻訳者にそのような力があるはずがない。

もうひとつ、その何年かに弟子の側は生活できる収入が必要だ。このため昔は、内弟子という制度があって、いわば成人の養子を引き受けるように、衣食住をすべて師匠が負担する仕組みになっていた。いま、そのようなことが可能かどうか、考えるまでもないだろう。

要するに、教室での教育にしる、弟子をとるにしる、翻訳者育成教育は教える側にも教えられる側にも負担がきわめて大きいのである。この点を十分に認識していなければ、教育は失敗する。これが過去の失敗から学んだ点である。

しかし、翻訳という仕事の性格を考えれば、違った方法もありうるように思う。たとえば、ノウハウを求める学習者に対して、ノウハウは確立されていないことを教えるのであれば、教えないという方法をとるべきだともいえる。教えないことで学んでもらうのである。教えるからいけない、教えない方がよいともいえるのである。

出版翻訳者育成教育には、優秀な若手を選び出し、仕事を紹介するという役割もある。この役割は、たとえば今回行うような翻訳コンテストで果たせるし、「翻訳通信」で投稿を募集し、優れた作品を掲載する方法もある。すでに優れた投稿があり、いくつかの問題点を指摘して改定してもらっている。12月号で紹介できるのではないかと考えている。実際に出

版に結び付くかどうかは分からないし、出版翻訳では運という要素が大きく影響するのだが、少なくとも可能性はある。「翻訳通信」の読者には編集者が少ないからだ。

つまり、問題は出版翻訳者を育てる教育が可能かどうかではなく、何が可能で何が可能ではないかなのである。教室での教育や弟子の教育といった方法では十分な効果があるとは思えない。教育を受ける側に幻想を与えかねないので、逆効果にすらなりうると思う。だからこれらの方法での教育は行っていないものの、現状で可能だし効果があると思う方法で、翻訳者育成のための教育を行い、社会に対する責務は果たしているつもりである。

そうはいつでも翻訳の腕を磨く方法を知りたいという人のために、ヒントを記しておこう。翻訳のノウハウはないというのは、じつは正確ではない。翻訳のノウハウは誰でも利用できる形で公開されている。後進を指導するという目的に適した形でまとめられていないだけである。どこに公開されているかというと、一流の翻訳家の訳書にである。訳書には翻訳家が使っている各種の工夫や方法が、目に見える形で示されている。だから、一流の翻訳家の訳書を読み、原著を読み、両者を比較していけばいい。さらに、原著の最初の1文から最後の1文までを訳して、1章ごとに名訳と比較していけばいい。学べる点がたくさんあるはずだ。これなら授業料を払う必要はない。訳書と原著を買うだけでいいのだ。

翻訳とは何か—研究としての翻訳（その3）

「翻訳とは〇〇である。」というテーゼの探究が本稿のシリーズであるが、世には暇な学問あり。「〇〇とは翻訳である。」と語る。是如何に。

翻訳とは何か—メタファーとしての翻訳

メタファーとは、「人生とは旅である。」の如く、「類似性に基づく比喩」と定義される（谷口 2003, p. 2）。つかみどころのない多義的・多面的な被説明項を、経験基盤に根ざした具体物によって見立てることで説明をする、というのがメタファーの根本である。だとするならば、“translation as X”という議論が翻訳をメタファーによって語る言説であるのに対し、「メタファーとしての翻訳」とは“X as translation”という構図であり、「翻訳」という抽象概念によって、さらにそれより抽象的な事象を説明しようという試みであると言える。では、これらの例を順に見てみよう（以下、特に断りがない場合は翻訳は筆者による）。

(A) “translation as X”

- | |
|---|
| (1) [言語間] 翻訳は、ある言語のメッセージを別の言語の個々のコード・ユニットで置き換えるのではなく、メッセージ全体で置き換えることである。
(Jakobson 1959/2000, p. 139, 訳はマンデイ 2009 準拠) |
| (2) 翻訳は、コミュニケーションを別言語で引き継ぐものではなく、先行するコミュニケーションについての新たなコミュニケーションである。
(ReiB & Vermeer 1984/1991, p. 66, 訳は藤濤 2007 準拠) |
| (3) 翻訳は、誰が見てもはっきりと分かる書き換え (rewriting) の典型である。
(Lefevere 1992, p. 9, 訳はマンデイ 2009 準拠) |
| (4) 翻訳とは、単なる忠実な再現行為ではなく、むしろ選択、組み合わせ、構造化、模造という意図的で意識的な行為である。そして時として、改ざん、情報の拒絶、偽造、暗号の創造ですらある。このように、翻訳者は想像力豊かな作家や政治家と同じように、知を創造し文化を形成するという権力行為に参画している。
(Tymoczko & Gentzler 2002, p. xxi) |

(B) “translational act as X”

- | |
|--|
| (5) 字幕翻訳は、
・「視聴覚言語転移」である。 (Luyken et al. 1991)
・「斜め翻訳」である。 (Gottlieb 1994) |
|--|

- | |
|---|
| ・「翻訳適合」である。 (Gambier 2004)
・「弱い立場の翻訳」という概念で表現される。
(マンデイ 2009, pp. 311-312) |
| (6) ビデオゲーム翻訳は、視聴覚翻訳とソフトウェア・ローカリゼーションの融合である。
(マンデイ 2009, pp. 312-313) |
| (7) ローカリゼーションとは、ある製品を、それが販売され使用される目標となる場に持ち込み、言語的かつ文化的に適切なものにする事。
(LISA による定義、訳はマンデイ 2009 準拠) |
| (8) [ニュース] 翻訳は複雑なプロセスの一つの要素であり、情報がある言語から別の言語に転位され、そして新しいコンテキストの中で編集され、書き換えられ、形が整えられ、掲載されるが、これは起点と目標という明確な区別が意味を失う程度まで行われる。
(Bielsa & Bassnett 2009, p. 11) |

(C) “X as translation”

- | |
|---|
| (9) 文化レベルでの翻訳は、領土レベルでの翻訳に対応する。前者はイングランド文化の受容であり、後者は住民の強制的な退去と移動を意味している。
(Cronin 1996, p. 49, 訳はマンデイ 2009 準拠) |
| (10) 喩としての翻訳。 [...] 情報伝達にさいして情報の発信者と受信者が個別に遂行するのは、つねに一種の翻訳行為—自己の「内面」の翻訳、および情報媒体の翻訳—である以上、いかなる言表、伝達、解釈であれ、それは一種の「翻訳」と解されてきた。 (真島 2005, p. 10, p. 34) |
| (11) フェミニズム理論家は、原作に対してしばしば派生的であったり劣った存在として捉えられている翻訳の地位と、社会や文学作品において抑圧されることの多い女性の地位との間に類似性を見出す。
(マンデイ 2009, p. 204) |
| (12) 南北アメリカの言語は翻訳であり、翻訳、対話、越境 (言語、文化、国家などの) について疑問を投げかけることは、南北アメリカの基盤や限界を再考するうえで必要である。
(Pym 2010, p. 143) |

俯瞰して言うと、(A) は「翻訳」そのものの分析、(B) は「翻訳」とは開かれた概念だとして、拡張された概念である「翻訳的行為」を分析するも

の、(C) は本来翻訳とは異なる社会的事象・現象を「翻訳」というメタファー（真島の言葉を借りると「喩」）として分析するものである。もう少し詳しく見てみよう。

(A) “translation as X”

- (1) 翻訳≒テキストの置換
- (2) 翻訳≒テキストによるコミュニケーション
- (3) 翻訳≒書き換え
- (4) 翻訳≒意図的・意識的な知の創造・文化形成行為

(1)は翻訳の言語行為性に焦点を当てた理論、(2)は翻訳の社会行為性も加味した理論、(3)(4)は翻訳学が文化的・イデオロギー的転回を経た学説であると言える。概括して言うと、翻訳の言語行為性に焦点を当てた理論は、翻訳学の言語学的時代と言われるものがそれに相当する。「等価」「翻訳シフト」「翻訳ストラテジー」「テキスト・タイプ論」などである。これに社会行為性が加味されると、「スコポス理論」「レジスター分析」「システム理論」「規範論」などが展開され、言語学的時代の次世代の理論となってきた。

(1)に代表される言語学的観点からの翻訳理論に対しては、①妥当な翻訳を行いさえすれば「真の意味」は言語間の境界をこえて透明に伝達されうるという「概念伝達の透明性」を当然視している点、②翻訳行為をはじめとする人間のあらゆる社会実践に先立ち、単一かつ均質で、たしかな体系性と可算性をそなえた実体としての言語像ないしは言語共同体があらかじめ前提されている点が批判されている（真島 2005, p. 14）。このことは、社会行為性が加味された諸学説においてもほぼ妥当する批判と言えるだろう（この点、Toury 流の「規範」論の前提である Even-Zohar の多元システム理論も、翻訳による受容言語側の言語の更新性（付随的に起点言語側も）や言語内での多元システムの動的進化は念頭に置かれているが、概念伝達の透明性や言語＝言語共同体の一枚岩性、翻訳に伴う表象の歪み・操作性の等閑視への批判的分析は見られない。この点、異論があればご指摘頂きたい）。

ところが、翻訳学がテキスト分析中心の時代から、「文化的・イデオロギー的転回」を経験することで、「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の（不）可視性」「翻訳の権力ネットワーク」などに焦点が当てられるようになった。これは翻訳のみならず広く表現行為という社会実践のもつ社会・文化・歴史的な

意義や役割を射程に入れているものである。ここで、他の主張も紹介してみよう（翻訳のメタファーのみならず、翻訳者のメタファーも併せて掲載する）。

(13) 翻訳者は介入的存在である。 (Munday 2007, p. xv)
(14) 翻訳者は社会学的な主体、経済的主体、文化的創造者、そして言語産出者という多岐にわたるものとして見るができる。 (Mossop 2007, p. 36 in Munday 2007)
(15) 翻訳は我々が望むような形、受け入れ可能な形で介入をしてきてはいない。地球上で持てる者と持たざる者との差が拡大し、固定してしまった帝国支配の秩序によって、国際関係の民主化への我々の努力が台無しにされてきた。 [...] 翻訳にはこの（悲しい）状態を引き起こし、維持する重大な役割があることは否定できない。 (Yameng 2007, pp. 54-55 in Munday 2007)
(16) 翻訳は本質的に暴力的である。外国のテキストを、目標言語内にすでに存在していた価値観、信念、表象に従って必ず再構成をするからである。 (Venuti 1993 in Baker 2010)
(17) 支配的な権力の中核にとっての翻訳者の問題は、翻訳者は複数の文化の狭間にいるとか複数の文化への忠誠の狭間にいるということではなく、相反する複数のイデオロギーや変革の綱領、支配的な統治から逃れる転覆の計略にあまりに深く関与しすぎることである。翻訳のイデオロギーは翻訳者の立ち位置の結果であって、この立ち位置は狭間のスペースなのではない。 (Tymoczko 2003 in Baker 2010)
(18) すべての翻訳にはその基底に政治的な側面がある。一回一回の翻訳行為は複数の言語や複数の文化の間に（平等または不平等な）権力関係を築いてしまうからである。[...] 翻訳はメタ言語的、メタ文化的活動であって、翻訳以外の執筆形態であれば日常生活に埋没し陰を潜めているような複数の言語的な価値や権力のモデル、言説のモードの間の対照や対立を顕在化させてしまう。 (Jaffe 1999 in Baker 2010)
(19) 特定の文学的な価値観を推進することにより、そして連携を強化することにより、女性は翻訳を、新たな文化的ダイナミクス創造に参画する強力な道具として使うことができる。 (Simon 2002 in Tymoczko & Gentzler 2002)
(20) 翻訳は中国では社会変革を促進するうえで重要な役割を担ってきたし、これからも担うだろう。1970年代後半に中国が諸外国に門戸を開放

して以来、中国は国家の発展および人民の幸福のために有益で役立つものなら何でも導入する方針を決めた。この過程において、翻訳は不可欠なのである。

(Kenan 2002 in Tymoczko & Gentzler 2002)

(21) 翻訳は今日では文化的闘争を映し出した容赦ない活動とは考えられておらず、むしろ、真の違いを前面に出し、そうすることで文化の構築における強力な道具を提供してくれる活動となると考えられている。翻訳を通して、[...] 我々は先行する文化を再び造り直し、新たなやり方で将来の展望を明示するのである。

(Gentzler 2002 in Tymoczko & Gentzler 2002)

(3)(4)も含めて、メタファー図式を簡潔に示すと、以下ようになる。

(A) “translation as X”

- (3) 翻訳≒書き換え行為
- (4) 翻訳≒意図的・意識的な知の創造・文化形成行為
- (13) 翻訳≒介入的行為
- (14) 翻訳≒社会・経済・文化的創造行為、言語産出行為
- (15) 翻訳≒南北格差助長行為
- (16) 翻訳≒暴力行為
- (17) 翻訳≒翻訳者の立ち位置を反映したイデオロギー行為
- (18) 翻訳≒権力関係構築行為
- (19) 翻訳≒新たな文化的創造行為
- (20) 翻訳≒社会変革の促進行為
- (21) 翻訳≒文化構築行為

こうした一連の「文化的・イデオロギーの転回」を経た学説群を分析すると、Munday のいう(13)「介入としての翻訳」が基底となっていて、それがどういう歴史的場面で適用されるか、どういう社会的側面に焦点を当てているかによって力点の置き方が異なるとも言う。あくまでも目安としてではあるが、以上の見解を次の3つの側面に分類してみたい。

- (一) 受容言語における機能・役割
…(3)(16)(20)
- (二) 起点言語＝受容言語間における機能・役割
…(14)(15)(17)(18)
- (三) 起点言語＝受容言語を超越した機能・役割
…(4)(19)(21)

では、これらの主張の歴史的・社会的コンテキストを加味しながら、順に検討してみよう。

(一) 受容言語における機能・役割

(3)はベルギーの Lefevere による主張で、文学テキストは権力、イデオロギー、制度などの要因で「書き換え (rewriting)」を余儀なくされ、権力的地位にある人々が一般大衆による消費を支配しているのに呼応して、翻訳テキストも権力によって統御されているとする (Lefevere 1992)。これは受容言語内での支配的イデオロギーや支配的詩論によって、翻訳は原テキストの表象を歪めるとするものである。(16)はアメリカの Venuti の主張で、受容化 (domestication) 方略を採ることによって、翻訳はアングロ・アメリカの主流文化に反映される自民族中心主義を後押しする暴力行為となるという (Venuti 1998)。(20)は中国の Kenan による主張で、中国において翻訳は社会変革のための触媒となってきたという (Kenan 2002)。これらはすべて、一言語内における翻訳の受容過程における翻訳の歴史的・社会的機能・役割に焦点を当てた議論である。同様の議論は、日本にもある。少し引用してみよう。

(22) 福沢は「全集緒言」で、「吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして日本国民の変通を促し、一日も早く文明開化の門に入らしめんとするの一事のみ」と概括している。彼はまた「世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと」ともその決意を表明していた。(吉田 2000)

当時、翻訳によって先進西洋文明を受容し、日本国およびその国民を文明開化させるという役割を翻訳が担っていたのである。このように、良きにつけ悪しきにつけ、翻訳は受容言語内での複雑な権力構造の中で大きな機能を担っているといえる。

(二) 起点言語＝受容言語間における機能・役割

(14)はカナダの Mossop の主張で、翻訳者は声 (voice) の選択において主体性があるという。基本的に翻訳という間接話法状況にある翻訳者が選択しうる声には、翻訳者の声、読者の声、原著者の声、翻訳依頼者の声、の4つがあり、前者3つのいずれかを選択する(ないし反映させる)ことは文化的創造者・言語産出者としての翻訳主体の表れであり、後者を選択することは翻訳者が社会的・経済的主体であることの証左であるという (Mossop 2007)。これは起点テキストの翻訳は受容言語における間接話法的状況であり、その間接性にどのぐらいコミッ

トするかは翻訳者の文化・社会状況に拠る、とするものである。(15)は中国の Yameng の主張で、北=南間、および南=南間における翻訳に表象の歪みがあり、南北の格差が助長されるという (Yameng 2007)。何を、どう訳すか、についての判断が、発展途上国に関する十分な知識に基づいて行われていないため、戦争、占領、恐怖、病気、貧困などについての共感と理解が欠如し、歪んだ表象が翻訳によって作られるとするのである。(17)はアメリカの Tymoczko の主張で、翻訳のイデオロギーは翻訳者がどういう政治的な立ち位置 (position) を取るかによって決まるのであり、これは Bhabha の言う狭間の領域 (space between) とは異なるとする (Tymoczko 2003)。翻訳はほとんどの政治的行為と同様、社会に参画し社会的変革を興す有効な手段だと見る見方を反映している。(18)はアメリカの Jaffe の見解で、フランス語からコルシカ方言への翻訳は、フランスによるコルシカ支配への政治的抵抗という意味合いがあり、翻訳は言語や文化の権力関係を前面に押し出すものだという (Jaffe 1999)。これに関連して、何を訳すかということについて次の見解が目玉を引く。

(23) 翻訳は概して一方通行である。弱小国は大国の文学のうち自国語に翻訳する価値があるものはすべて矢継ぎ早に翻訳するが、逆は成り立たない。弱小国は (大国に対して) 偏狭な見方や無視した姿勢を取るわけにはいかないが、大国は弱小国に対してはそういう姿勢を取ることができるのである。

(Boldizar 1979 in Jaffe 1999 in Baker 2010)

これらは [起点言語の国家 (ないし共同体)] = [受容言語の国家 (ないし共同体)] の間の権力不均衡からくる翻訳の政治問題を提起しているといえよう。

(三) 起点言語=受容言語を超越した機能・役割

(4)は翻訳に内包する政治・イデオロギー的な操作性を指摘するもので、アメリカの Gentzler と Tymoczko の見解である (Tymoczko & Gentzler 2002)。植民地主義や帝国主義が可能だったのは大国の軍事的・経済的優位だけでなく植民地や被支配者に関する知識や表象によっても支えられたわけであり、それには翻訳が深く関与していたことから、そのことを一般に翻訳のもつ知識・文化の創造性について敷衍したものであるといえる。(19)はカナダの Simon による見解で、フェミニズムの立場に立

っている。主体が自由に越境する今日の世界において、翻訳は国民国家概念を弱め、文化の越境や偶発性による文化のダイナミックな創造を促すものとして捉えている (Simon 2002)。(21)はアメリカの Gentzler の見解で、起点言語=受容言語を超越した翻訳の機能・役割を概括的に捉えている (Gentzler 2002)。翻訳は起点言語側・受容言語側という差異を超えて、社会構築・文化構築を行う機能を担っているとする。

以上、(A) “translation as X”の諸学説を見てきた。「翻訳」を言語行為と捉えるか社会行為と捉えるかで分析の切り口や視点が随分異なるし、後者の場合にも、どういう社会的コンテクストにおける翻訳の機能・役割を論じるかによって見解が大きく異なる。次号では、「拡張された翻訳概念」におけるメタファー (“translational act as X”: (5)~(8)) と、翻訳概念によって社会現象を分析する諸学説 (“X as translation”: (9)~(12)) を分析する予定である。果たして暇学問の無価値の醍醐味が味わえるだろうか? おあとがよろしいようで。

参考文献 (学説を直接引用したものに限る)

- Baker, M. (ed.). (2010). *Critical readings in translation studies*. London/New York: Routledge.
- Bielsa, E. and Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London/New York: Routledge.
- 藤濤子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社
- 真島一郎 (編) (2005) 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』人文書院
- Munday, J. (ed.). (2007). *Translation as intervention*. London/New York: Continuum International Publishing Group.
- マンデイ, J. (著)・鳥飼玖美子 (監訳) (2009) 『翻訳学入門』みすず書房 [原著 Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London: Routledge.]
- Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London/New York: Routledge.
- 谷口一美 (2004) 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』研究社
- Tymoczko, M. and Gentzler, E. (eds.). (2002). *Translation and power*. Amherst/Boston: University of Massachusetts Press.
- 吉田忠 (2000) 「『解体新書』から『西洋事情』へ—言葉をつくり、国をつくった蘭学・英学期の翻訳」芳賀徹 (編) (2000) 『翻訳と日本文化』(50-66 頁) 山川出版社
- * 編著論文集所収の個別の書誌情報は割愛している。

東洋の翻訳論 III

——蔵蒙対訳「学者基本典」を出発点として——

北村彰秀著（個人出版） A5版 全80ページ、定価 700円（税別）

— 著者より —

「東洋の翻訳論」「続 東洋の翻訳論」に続く、とりあえずの完結編である。

「東洋の翻訳論」においては

仏典モンゴル語訳の際に編まれた「学者基本典」と呼ばれる辞書の序文にある翻訳論を紹介した。

また、

「続 東洋の翻訳論」においては

仏典漢訳の翻訳論を全体的に眺め、また中国近代の林語堂の翻訳論にも触れ、「学者基本典」の翻訳論との比較を試みたが、

（詳しい内容は翻訳通信 2009年10月号に掲載）

本書においては、テーマごとの記述とした。主なテーマは

- ◎ 仏典漢訳の翻訳論はどのようにしてチベット、モンゴルに伝わったか
- ◎ 仏典翻訳における専門用語の取り扱い方
- ◎ 仏典翻訳用の辞書のユニークな性格
- ◎ 仏典の漢訳、チベット語訳、モンゴル語訳において自然な訳、わかりやすい訳、文学的な訳の出て来た次第
- ◎ 清朝多言語社会における翻訳状況

3巻全体を読み進むにつれ、読者の目の前に、2000年近くにわたる翻訳の歴史が、大河ドラマのように浮かび上がってくることであろう。場所はインドから漢民族居住地域、チベット、モンゴルに及ぶため、まさに広域大河ドラマとも言うべきものである。

長編小説にできなかったのは残念である。著者の方法は歴史記述、また歴史の検討である。

論文に近いものなので、冷静な文章となるように努めた。しかし出来上がったものをみると、相当にラジカルなものになった。わたしはただ、先人がどのように翻訳に取り組んだかの事例をあげ、検討を加えただけなのであるが・・・いや、弁解はやめよう。生産的な議論なら、わたしは受けて立ちたい。

何であれ、歴史から学ぶことの重要性は論を待たない。ただ、歴史というものは、今晚のおかずは何にしようかというような、目の前の問題にすぐに答えを出してくれるものではない。しかし、翻訳や翻訳論の歴史は、一般の歴史とは異なり、現実的な示唆に富んだものである。例えば、日本語に訳せない語はカタカナ表記にすべきか、翻訳口調はよしとす

べきか等々の課題と取り組むにあたって、参考となるいろいろな先例を提供してくれる。

この第3巻は完結編のつもりである。しかし、本書の問題提起は、むしろスタートであるのかもしれない。例えば、

- ◎ 翻訳口調の歴史、是非、我々の取るべき道
 - ◎ 漢民族独自の美意識
 - ◎ 自然な文章とは何か
 - ◎ 中身を訳すのか、言葉を訳すのか
- 等々。それぞれが、1冊の本になるような大きな課題である。

本書は、翻訳者にとっては、いろいろな示唆を提供し、また、翻訳者としていかにあるべきかという問題を考えさせるものとなるであろう。

また、研究者にとっても課題提供の書であり、同時に、他の書物からは得にくい情報を提供するであろう。

（次第に東洋における翻訳についての研究が盛んになってきているし、また、その方面の文献も出ているが、この3冊のシリーズには、他の文献からは得にくい情報を盛り込むように努めた。また、本書のようなアプローチは今までにないものであると信ずる。）

いずれにせよ、言葉の問題を真剣に考え、取り組むすべての人にとって、かなりの刺激となるものであると信ずる。

専門家でなくとも十分理解できるようにできるだけわかりやすく書いたので、多くの方に読んでいただければ幸いである。

（モンゴルで印刷のため、第1巻は多少インクの濃淡あり。ただし、読みにくいほどではありません。）

現在のところ一般の書店では扱っておりません。ご注文の場合は、下記メールアドレスにご住所をお知らせください（国外も可）。代金銀行振込、入金確認後発送、郵便事情にもよりますが、1週間前後で届くことと思います。（本代、送料、手数料合わせて1冊ご注文の場合1,000円、3冊では2,550円とします。著者海外在住、また個人出版のため販売方法が限られ、ご不自由をおかけしますが、ご理解くださいますよう。）

e-mail: a_kitamura07@yahoo.co.jp (aのあとはアンダーライン)

わたしの英語勉強法

ここでは、私が興味深いと感じた韓国の本や今韓国で話題の本を毎月紹介していく。この記事を通して、少しでも多くの読者の方に韓国の良書を知って頂き、韓国に親しみを持って頂ければ嬉しく思う。

今月紹介する本は『わたしの英語勉強法(原題: 나의 영어 공부 이력서)』だ。本書では、年齢・性別が様々な韓国の英語上級者 17 人が自身の英語の勉強法を詳しく伝授している。17 人の英語上級者が綴った英語勉強法は多種多様で、文法や会話を磨くものもあれば、TOEIC・TOEFL など各種試験の準備方法、さらには、勉強の動機づけを高める方法などもある。韓国語は日本語と文法がほぼ同じであるため、本書は日本人にとってもためになると言える。

本書から学べることは、国内で安く効果的に英語を勉強する方法がいかにかに多いか、という点だ。わたしたちは、英語を勉強する手段といえはすぐに留学や英会話教室などを思い浮かべがちである。実際、英語力上達のために今まで何十万、中には何百万円も投資した方もいるのではないだろうか。しかし、本書の著者には留学に行ったことがない人も多く、中には英会話教室にさえ通ったことがない人もいる。また、英会話教室に通ったとしても、そればかりに頼るのではなく、自発的に学習に取り組んでいる人ばかりだ。

著者のある男性は 18 カ月間独学で英語を勉強し、全国大学生英語ディベート大会で 2 位となった。また、著者のある女性は留学に一度も行かずに TOEIC の勉強を始め、開始後わずか 4 カ月で 900 点を突破している。どちらもかなり高い壁だが、彼らは独自の勉強法と努力でそれを乗り越えたのである。本書には、彼らがどのようにしてこのような偉業を成し遂げたのかが詳しく書かれている。

本書の 1 番のアピールポイントは、韓国で刊行されたということにある。韓国はアジアで最も TOEIC の平均点が高く、有名企業に入る学生は大部分が 900 点を超えている。大学の編入や就職活動など何をするにも英語が必要になってくるため、大学を休学して留学に行くこともよくある(私の友人の中でも大学を休学して英語の勉強に励む学生が多かった)。このようなハイレベルな競争の中で英語力を磨いてきた著者たちが執筆し、多くの読者から高評価を得た本書はかなり信頼が置けるといえる。何度も英語の勉強に挫折した方がいれば、ぜひ本書を読んでいただきたい。17 人の様々な学習法やモチベー

ションを維持する方法の中から、きっと自分に合ったやり方が見つかるはずだ。

題名: わたしの英語勉強法

原題: 나의 영어 공부 이력서

页数: 264 頁

著者: キム・ミンシク、他 16 名

出版社名: ブッキー

発行: 2008 年 1 月 18 日

著者紹介: 韓国の英語上級者 17 人。学生、教師、アナウンサー、軍人、主婦など、多種多様な分野で活動しながら日々英語の勉強に努めている。



本の一部を紹介!

17 人の著者の中で、最も私の印象に残ったキム・ミンシクさんによる独学の英語勉強法の一部をここで紹介したい。キム・ミンシクさんは先ほど例に挙げた、全国大学生英語ディベート大会で 2 位となった人物である。大会の相手には、アメリカの中高を卒業しソウル大学に特例で入学した学生もいた。そのようなハイレベルな大会において独学の英語で 2 位になることができたキムミンシクさんのとっておきの勉強法の一部である<音だけを聞いて書き取る勉強法>を以下に紹介する。

「書き取りをしよう。聞こえるままとにかく書き取ろう。(中略)本を見ながらテープを聞くと、その文章の単語が全部理解できているような気になってしまうが、実際は聞こえる単語だけが聞き取れ

ており、聞き取れない単語は死んでも聞き取れないものだ。“初級会話ぐらいなら全部聞き取れるだろう！”とおっしゃる方。本を閉じて書き取りをしてみてください。どういう意味かが分かる文章でも、書き取ろうとすると意外に聞き取れない部分が多いはずだ。だが、単語 1 つが聞き取れないからといってすぐに諦めて本を開いてはいけない。音だけで綴りを推測していき、辞書をくまなく探してみよう。英語は発音記号からなっている表音文字であるため、どんなに難しい単語でも根気よく綴りを組み合わせると見つけ出すことができる」

英語力を上げるためには、とにかく聞こえたままに単語を書き取る必要がある。分からないといってすぐに答えを見るのではなく、分かるまでずっと聞き続けることが大切だと著者は主張する。

「書き取りをする最も大きな理由は、自分の頭の中にある国産英語との別れのためだ。牛乳 1 杯、つまり glass of milk を私はいつも“グラス・オブ・ミルク”と読んでいた。しかし、書き取りをしてみるとネイティブスピーカーの発音では“グレッソツミヨック”（※1）のように聞こえる。グレッソ、ミヨック？ ワカメに喧嘩を売っているのか？ 始めのうち、私はこんな単純な文章も音だけを聞いて書き取ることができなかった。経験を通して、だんだんと単語の最後に来る子音は音が消え、子音の前にある L は発音されなくなる、ということなどが分かってきた。これは文法で説明できる問題ではない。

“グレッソツミヨック”を聞いて glass of milk を導き出す過程、このような書き取りの勉強は、結局、私の頭の中の国産英語と決別させ、ネイティブスピーカーの英語に出会わせてくれたのだ」

※1 韓国語で“グレッソ”は“そうだったよ”、“ミヨック”は“ワカメ”を意味する。韓国人が glass of milk をネイティブの発音で聞くと“そうだったよ、ワカメ”という不思議な言葉に聞こえる。

「もちろん、この学習法は大変である。しかし、会話教材を聞きながら独学で勉強しようとする者のほとんどは初級では順調に進むが、中級や上級会話に入った途端学習効果と意欲が落ちてやめてしまうケースが多い。初級で聞き取れない単語を文章の意味が分かっているからといってなおざりにすると、結局中級や上級で壁にぶつかってしまう。聞き取れない単語は簡単にあきらめずに最後まで根気よく聞き取ろうとする努力が必要だ」

多くの学習者は初級会話を甘く見てしまいがちだが、“やさしいレベルのものから疑問を確実に潰していく”この作業が後の勉強で大きく生きてくるのである。

この本には、他にも様々な英語の学習法が紹介されている。一部著者の勉強法を簡単に紹介する。

★ジョン・ヘムンさんの「TOEFL を集中的に短期間で終わらせる方法」

1. 緻密に計画を立て、できる限り実行しよう
2. 聞き取れるまで何度でも聞きなおそう
3. 段落の中心の内容を把握しよう
4. 語彙力の勉強では、同義語を把握しよう
5. スピーキングの練習はうるさい場所で
6. ライティング、模倣は創造の母だ
7. スタディーグループを活用しよう

★ジ・ヒョンシルさんの「文法、暗記ではなく体で覚えよう」

1. 文法は英語の骨格だ
2. やさしい文法書を何度も解こう
3. 簡単で興味がわく英語の文章を読もう
4. 簡単な言葉を書いてみよう
5. 文法の勉強自体を目的と考えてはいけない

★ハン・ジファンさんの「読解、及び語彙の勉強法」

1. 好きな作家や興味のわく作品から始めよう
2. 単語は読み飛ばしても構文は確実に押さえよう
3. 1、2 ページだけでもいいから毎日読もう
4. 好きな勉強をしよう

本書に対する韓国読者の感想（韓国のインターネット書店 YES24「会員のレビュー」より）

この本に登場する著者の中には、平凡な主婦もいれば、まだ大学生もいる。有名な英語講師の話ではなく身近な立場の人の話であるためより共感ができる。（中略）今年には著者たちが教えてくれた話を通して英語を勉強する目的を設定して動機づけをし、勇気と自信と根気を持って取り組みたい。

（ペンネーム：은빛연어）

自分に合う勉強法を探すために英語カフェなどでいろいろと質問をしてきたがなかなか見つからなかった。本書は、私に多くの勉強法を教えてくれた。

（中略）実際に本書で気に入った 2 つの方法を実践しており、それらは私が英語を勉強していく上で大きな助けとなっている。私は、英語の勉強をしたいが適切な勉強法を知らないという友人に本書をおすすめしたい。この本があれば、比較的試行錯誤をあまりせずに自分に合った勉強法を見つけられるからだ。（ペンネーム：loww99）

20周年記念JTF翻訳祭の企画意図

生まれ変わったJTF翻訳祭

諸事情により日本には翻訳関係の団体がいくつもあります。それらの団体のひとつである社団法人日本翻訳連盟（以下 JTF）は、経済産業省許可の公益法人という位置付けを活かして、翻訳者・翻訳会社・翻訳発注元のいずれの立場からも参加できるところにその特色があると私は思っています。

JTF は毎年秋に「JTF 翻訳祭」というイベントを主催してきました。著名な講演者を招待しての基調講演をメインに据え、翻訳者・翻訳会社・翻訳発注元が議論するパネルディスカッション、講演、交流パーティという構成で 20 年近く継続してきた恒例行事ですが、今年は従来の構成を大きく変更してカンファレンス形式で開催されます。筆者はこの行事の企画運営を担当する翻訳祭企画実行委員のひとりとして、一人でも多くの方にぜひ生まれ変わった JTF 翻訳祭へ足を運んでいただきたく、この場を借りて本年度翻訳祭の企画意図をご紹介します。

翻訳業界の「いま」を知る機会として

筆者は IT 関係の翻訳（ローカリゼーション翻訳）に従事しているためにソフトウェア業界のカンファレンスに参加する機会がありますが、一日の参加でいろいろな講師の話を自分で自由に選んで聞くことができ、なかなかよいイベントだと感じてきました。ひるがえって自分の本業である翻訳業界をみわたすと、世界のレベルでは Localization World や LISA などの行事でカンファレンスが定着しており、日本でも日本翻訳者協会（JAT）が早々にこの形式での行事（IJET）を提供して今日に至りますが、IJET は日英のネイティブ翻訳者を主たる対象とするイベントであり、自分のように英日翻訳に従事する翻訳者・翻訳業界人のためのイベントが日本にはないなあという不満をここ数年感じてきました。

それぞれの日常の仕事においては、翻訳業界人の誰もが手馴れた翻訳の一分野または一工程にかかわって仕事をこなしているわけですが、一年に一度くらいは自分が生活の糧を得ている「翻訳業」という業界の全体がいまどんなことになっていて、明日どんなことが起きそうか、それを自分の目と耳で確かめられる（あるいはそんな気分が味わえる）イベントがあってもいいのではないかと。そんな思いを昨年度の JTF 翻訳祭でアンケートに記入して提出したところ、アンケートを読んだ JTF 翻訳祭企画実行

委員会の皆さんが寛容にも提案を受け入れてくださり、今年度の委員として企画運営に直接携わる機会を得ることができました。

その後の準備では数え切れないほど多くの方がいろいろな側面から知恵と力を貸してくださり、12 月には新しいカタチの JTF 翻訳祭が実現するところまでこぎつけました。企画の趣旨をご理解くださりご協力くださったすべての方に心から感謝します。

ツールの知識を更新する機会として

私は IT 翻訳という仕事から、翻訳支援ツール（特に近年は機械翻訳の関連ツール）の動向には仕事上も個人的にも大きな関心を持っています。多くの翻訳業界人にとって翻訳支援ツールの動向を掌握するうえでの泣き所は、ここ数年で以前とは比較にならないほど翻訳支援ツールの種類も数も増えてしまい、メルマガをたまに読むくらいではとても最新のツール事情に追いついていけない状況になってきたことでしょう。

かくなる上はそれぞれが一人で思いつめて勉強するより皆で教えあって知識を分かち合うのが誰にとってもよいことだろうというわけで、今年度の JTF 翻訳祭ではセッションの約半数を翻訳支援ツールとその技術に関連する内容に設定しました。今後も毎年このカンファレンスを継続して「年に一度 JTF 翻訳祭に参加すれば翻訳支援ツールに関する自分の知識も時代遅れにならずにすむ」と皆さんから言われるイベントに育てることが私の夢です。

知らない<他者>と知り合う機会として

ツイッターや Facebook に代表される SNS の普及もあって、ますます人のつながりにネットが介在する時代になってきましたが、やはりなんらかの形で生身の他者と出会うことが人間にとって大きな喜びの（ときには苦しみ）源泉であることは誰もが経験から知っているとおります。

翻訳業界においても仲間内の勉強会や講演会などを通じてリアルに人と会う機会がいろいろあると思いますが、翻訳者であれ翻訳会社の社員であれ日常の人間関係は翻訳業界内のごく狭い範囲内に限られる場合が多いかと思っています。一年に一度くらいは、今まで翻訳業界の中において自分が知らなかった<他者>と出会う機会があってもいいのではないのでしょうか？

ここで<他者>というのは人格に限らず、別分野の翻訳や、翻訳に関連する学問や、専門外の書籍かもしれません。たとえばアカデミックな側面だけをとりあげても翻訳は翻訳学・言語学・自然言語処理などの互いに独立した学問領域と深いかわりがあり、日常業務をこなすだけならとりあえず必要ないと考えていた学問領域に日常の問題を解決するヒントが隠されていることもあったりするのが言葉の世界の奥深さかと思えます。多様な立場からの参加者・講演者を受け入れる JTF 翻訳祭を介して、これまでは知らなかった<他者>と出会っていただければさいわいです。

翻訳業界に自分や自社をPRする機会として

今年は聴衆の立場で参加してくださった方の中から、来年度以降の JTF 翻訳祭の講演者が現れることを期待しています。JTF 翻訳祭のカンファレンスで講師として発表することが翻訳業界全体にあなたの存在をアピールする好機になります。

また、新しいカタチの JTF 翻訳祭が今後業界イベントとして発展していくことは翻訳業界における展示会としてのイベント価値が増すことにつながり、翻訳支援ツールの開発企業や翻訳会社で営業や採用を担当しておられる方にとっては市場にアクセスして自社のサービスや製品を PR する好機となります。

ここまで充実した内容で 6,500 円

基調講演は日本における翻訳学の草分けの一人である水野的さん（日本通訳翻訳学会副会長）にお願いしました。この講演が翻訳業界と翻訳学会が今後お互いをより深く知っていくよい契機となることを願っています。

パネルディスカッション1では、社会言語学者の鈴木義里さん（大正大学准教授）をナビゲーターに迎えて「英語公用語化」をテーマに取り上げます。今年是有名企業の社内公用語として英語が採用されたことが話題になりましたが、これまで受注産業として自ら市場を創造することがなかった翻訳業界にとって英語公用語化は市場創造の契機になり得るといふ前向きな問題提起を含む意欲的な企画です。

パネルディスカッション2は、例年の翻訳祭でも人気のある定番企画として各分野で実績のある翻訳者の方たちの座談会を用意しました。なんといつでも翻訳業界の主役である翻訳者という職種のベストプラクティスとして参考にしていただければと思います。

トラック 1&2「翻訳業界分科会」は、産業翻訳の各分野における新たな需要の動向とその開拓方法を、

翻訳会社と翻訳発注元が対話する形式で提示するというコンセプトに基づいて企画しました。自社の顧客を他社の目前に紹介するのは翻訳会社にとって慎重な判断を必要とすることですが、企画の趣旨に賛同して顧客企業とともにご登壇くださる翻訳会社の皆様には感謝と敬意を表させていただきます。

トラック 3&4「支援ツール分科会」は、前述したとおり発展の早いこの分野の最新状況を眺めて知識をアップデートしていただく企画ですが、市場の動向をふまえて機械翻訳に関連するセッションを4つ用意しています。

企業が製品などを展示する「翻訳プラザ」も過去最高の出展数になりました。制限言語ツールや統計的機械翻訳ツールなど今年初めて登場するソリューションもあり、過去最高の充実度です。

以上駆け足で今年度の JTF 翻訳祭の内容をご紹介しましたが、いずれのセッションも単発でセミナーとして成立するような濃い内容を一同に集めて一度に話が聴けて 6,500 円（JTF 会員は 5,000 円）とは間違いなく「お買い得」であると自負しています。

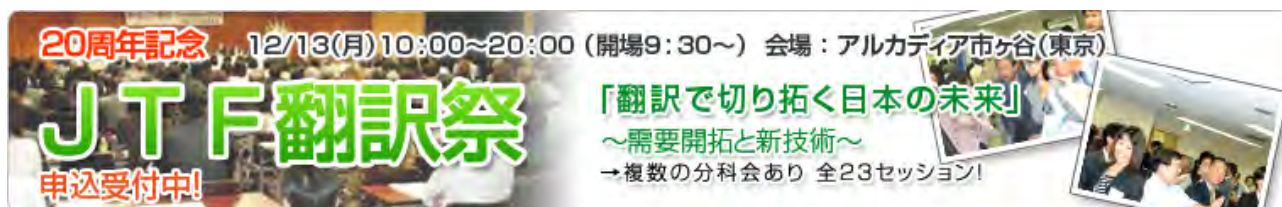
ご参加をお待ちしています

今年 JTF 翻訳祭は 20 周年企画ということで未知の事業であるカンファレンス形式での開催に挑戦しました。今年度の JTF 翻訳祭が事業としてもしも赤字になれば来年度以降はカンファレンス形式での開催が難しくなる可能性もあります。カンファレンス形式の JTF 翻訳祭を定着させるためにも、今年度の参加者数が目標数を上回りイベントとして採算がとれることを実証する必要があります。生まれ変わった JTF 翻訳祭にぜひお越しくください。皆様のご参加を心からお待ちしています。

謝辞

最後になりましたが、翻訳祭企画実行委員会の東郁男さん（株翻訳センター代表取締役社長、JTF 会長）、川村みどりさん（株川村インターナショナル代表取締役、JTF 理事）のご理解とご協力、寺田大輔さんをはじめとする JTF 事務局スタッフの皆さんのご尽力に深く感謝します。翻訳者の山岡洋一さんからは企画上の重要事項を左右する貴重なアドバイスを頂きました。あわせてお礼申し上げます。

なお、この記事の内容はすべて筆者の個人的見解であり社団法人日本翻訳連盟を代表するものではないことをおことわりします。



ごあいさつ

来る12月13日(月)、東京のアルカディア市ヶ谷(私学会館)を会場として恒例の「JTF 翻訳祭」を開催いたします。今年で20周年を迎えることになり、経済産業省はじめ各関連団体より後援をいただき、講演・パネルディスカッション・展示会・交流パーティーなどの催し物を用意しております。

翻訳祭は翻訳者、翻訳会社、クライアント、翻訳支援ツールメーカーなど業界関係者が一堂に会するイベントです。参加者の皆様が翻訳祭を通して新たな人脈を形成するとともにビジネスの機会を得ていただくことを願っております。

ご多忙中お手数とは存じますが、是非ともご出席賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ホームページ

http://www.jtf.jp/festival/festival_top.html

日時

2010年12月13日(月) 10:00~20:00 (開場 9:30)

場所

「アルカディア市ヶ谷(私学会館)」

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 TEL: 03-3261-9921

※JR・地下鉄「市ヶ谷駅」より徒歩2分

(地図) <http://www.arcadia-jp.org/access.htm>

参加料金

講演・パネルディスカッション: JTF 会員 5,000 円 非会員 6,500 円

交流パーティー: 6,000 円

・参加料のみで交流パーティーを除くすべてのトラックの講演・パネル・セッションに参加できます。

お申し込み

https://www.jtf.jp/festival/festival_apply.html

申込締切

2010年12月6日(月)まで

・定員になり次第、受付を終了致しますので、お早めにお申し込みされることをお勧め致します。

・当日参加の受付も致しますが、満席の場合はご参加いただけない場合もございますので、予めご了承ください。

主催

(社) 日本翻訳連盟

後援

経済産業省 / アジア太平洋機械翻訳協会 / STC 東京支部 / 中国翻訳協会

一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会 / 社団法人電子情報技術産業協会

公益社団法人日本工業英語協会 / 日本翻訳者協会 (JAT)

企画運営

20周年記念 JTF 翻訳祭企画実行委員会

プログラム詳細

https://www.jtf.jp/jp/festival/festival_program.html

メイン会場	トラック 1	トラック 2	トラック 3	トラック 4
基調講演他	翻訳業界分科会 1	翻訳業界分科会 2	支援ツール分科会 1	支援ツール分科会 2
基調講演「翻訳研究 (Translation Studies) と実務の接点」				
パネルディスカッション1 「英語公用語化と翻訳の未来」	メディカル「翻訳プロセスはプロレスだ！：新薬開発の現場から」	金融「法定開示文書の英訳 ～ニッチな市場の確かな需要に応える～」	「オープンAPI とクラウドによる翻訳管理システム XTM」	「翻訳者だからできる！世界に向けたアプリの開発と販売」
	特許「企業と知的財産 ～特許海外展開と翻訳～」	多言語「多言語翻訳ベンダーの現状と成長戦略」	「個人も使える！業界で共有する翻訳メモリー TDA ～進化していく翻訳メモリー～」	「No.1 フリー翻訳支援ツール OmegaT 入門」
パネルディスカッション2 「強い翻訳者から学ぶ ～いかにしてお客様の満足を得るか～」	自動車「TTDCにおける自動車技術翻訳」	出版「出版翻訳の現状と動向」	「ローカリゼーション・ソリューション 模擬コンペティション」	「統計的機械翻訳の理論と実装」
	Native・日英翻訳「簡潔かつ明確なビジネス英訳 ～英語ネイティブの観点とアドバイス～」	映像「エンタメ翻訳における新たなマーケットとしてのゲーム翻訳」	SDLジャパン(株) ライオンブリッジジャパン(株) Welocalize Japan	「平均時速 650 語の翻訳支援技術 —機械翻訳を活かして効率と高品質を両立する秘密」
	法律「未来につなげる翻訳力 ～法律翻訳の動向と契約書翻訳ワンポイントアドバイス～」	IT・ローカリ「海外発、ローカリゼーションのゆくえ」	「機械翻訳時代に翻訳者の生きる道」	「ポストエディット 入門 2010」

■交流パーティー 18:00～20:00 (120分) 3階 富士の間

情報交換を行い、これからの業界の展望などを語り合う機会となります。翻訳祭の講演者やパネリストの方々も参加される予定です。また昨年に続いて「ほんやく検定1級合格者の表彰式」を行います。お仕事のための人脈作りや最新の業界の動向をつかむためにぜひご参加ください。

■翻訳プラザ 9:30～18:00 6階 阿蘇の間

提供各社の最新版の翻訳支援ツールをエキスパートに質問しながら実際に体験できる「展示・デモコーナー」と、書籍の購入や翻訳会社などへの相談ができる「書籍・翻訳相談コーナー」が開設されます。

<出展企業一覧>

https://www.jtf.jp/jp/festival/festival_top.html

最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト

10月号に掲載した「翻訳通信」翻訳コンテストのお知らせを再掲載する。

一読したぐらいでは理解できない文章こそ、翻訳する価値がある。そういう観点から、難しい課題の翻訳を競うコンテストを企画しました。

第1回の課題は J.S. Mill, *The Principles of Political Economy, Book 4, Chapter 6, Of the Stationary State* です。読めば分かるように、アダム・スミス『国富論』第1編第8章やトマス・マルサス『人口論』の見方を批判したものであり、150年前に書かれているものの、現代的な意味が大きいとみられます。これを課題に選んだのは、経済学文献のアンソロジーを企画しており、そこに収録したいと考えているからです。

翻訳は容易でないので、腕の見せ所がたくさんあります。とくに、原文の論理をどう伝えるかが難題です。いわゆる翻訳調ではミルの論理を日本語で伝えるのは難しいので、翻訳のスタイルと訳文の文体を工夫する必要があります。

アンソロジーに収録したい文献なので、優秀作は出版用に採用する計画です。優秀作の賞金、賞品などはありませんが、出版に使った場合には当然ながら、印税が発生し、出版社から現金で支払われます。ただし、出版時期は決まっていませんし、アンソロジーの企画自体が実現しない可能性もあります。ですから、優秀作に選ばれた場合にも、当面は「翻訳通信」の紙面で紹介されるだけだとお考えください。

応募者の年齢、翻訳経験、職業などの制限は一切ありません。たとえば、訳書が100点以上ある翻訳家でも、1点もない学習者でも応募できます。ただし、グループ訳は受け付けません。何人かのグループで検討した場合にも、各人がみずからの責任で応募してください。制限はこの点だけです。

古典の翻訳では既訳を参考にするのは当然です。参考にした場合には、訳文の終わりに参考文献としてあげてください。ただし、既訳を参照した結果、翻訳の質が低下する場合があります。既訳は手に入りにくいので、無理をして入手する必要はないと考えます。図書館などで既訳を探す時間を原文の読み込みにあてた方が良い結果になる可能性は充分にあります。

応募要領

課題：[J.S. Mill, Of the Stationary State全文](#)（以下に冒頭部分を示します）。

書式：[所定のフォーム](#)でMSWordで作成

締め切り：2011年1月10日

送付先：電子メールの添付ファイルにて以下に送付

GFC01200アットnifty.ne.jp（アットは@に変更）

電子メールの件名：翻訳コンテスト応募

電子メール本文に以下を明記ください。

氏名：

本名（氏名が筆名の場合）：

住所：

職業：

電子メール・アドレス：

Of the Stationary State

1. The preceding chapters comprise the general theory of the economical progress of society, in the sense in which those terms are commonly understood; the progress of capital, of population, and of the productive arts. But in contemplating any progressive movement, not in its nature unlimited, the mind is not satisfied with merely tracing the laws of the movement; it cannot but ask the further question, to what goal? Towards what ultimate point is society tending by its industrial progress? When the progress ceases, in what condition are we to expect that it will leave mankind?

It must always have been seen, more or less distinctly, by political economists, that the increase of wealth is not boundless: that at the end of what they term the progressive state lies the stationary state, that all progress in wealth is but a postponement of this, and that each step in advance is an approach to it. We have now been led to recognize that this ultimate goal is at all times near enough to be fully in view; that we are always on the verge of it, and that if we have not reached it long ago, it is because the goal itself flies before us. The richest and most prosperous countries would very soon attain the stationary state, if no further improvements were made in the productive arts, and if there were a suspension of the overflow of capital from those countries into the uncultivated or ill-cultivated regions of the earth.（注意：これは冒頭部分のみです。[全体はこちらにあります。](#)）